博士学位論文審査要旨

2017年11月22日

論文題目：　日本中世仏像文化史論―南都文化圏・慶派仏師を中心に―
学位申請者：　杉﨑　貴英
審査委員：

主　査：	文学研究科	教授	井上　一稔
副　査：	同志社大学	名誉教授	竹居　明男
副　査：	京都大学大学院文学研究科	教授	根立　研介

要　　旨：

本論は、中世に制作される仏像彫刻の周辺・背景にはいかなる文化史的状況があったのか、それは古代以来の仏像彫刻といかに関わるのかという問題を明らかにしようとする。この視座のもとに、各論17章と5附章が4部に配置され、2資料を加えて構成される。

要旨を記すにあたって、多数の論考から構成されるゆえに全てを取り上げることはできないが、核となる貞慶に関する論考、慶派仏師を中心とした論考、仏像の伝来した場に関わる論考に分けて説明する。先ず貞慶に関わる第4章は、峰定寺釈迦如来像の納入品から、施主藤原盛実（帰阿）や納入品に名のみえる人々と貞慶との関係を跡づける貞慶研究の基礎となる仕事。第5章は、石清水八幡宮の祐清が造立した正法寺阿弥陀如来像が、建暦二年に貞慶が供養したと記される未注目の『解脱上人明恵上人伝絵巻』の事実性を確認する。第6章は、海住山寺の麓にある現光寺十一面観音像を、貞慶が鼓吹した観音信仰のなかで捉え、弟子覚真が没する1243年に作期の下限を求める。第9章は、貞慶が菩提山正暦寺の住僧蓮光房の依頼によって「不空羂索」という著述をなしたこと、蓮光房は同寺の史料に法然の弟子と記されることに信憑性があることを述べる。専修念仏を批判したとされる貞慶であるが、法然教団の念仏者との関係を見直す研究が近年発表されており、本論もその点で注目される。

慶派仏師をめぐる論考では、第1章で慶派を含む仏師が自らに対する造仏の勧賞を子や弟子に譲って僧綱位を得る事例は、世襲化体制化を維持する手段であったこと、第2章で成朝が京都仏師に対抗して慶派を維持するために、興福寺復興事業の造仏を受注しようとしている様を二通の文書から描き出す。第3章では、慶派を確立させた運慶が京都で営んだ地蔵十輪院の本尊の行方、運慶が父康慶に、堪慶が父運慶に追福像を造っていること、前の像は現在六波羅蜜寺に伝わる地蔵菩薩像であり、後の像は快慶が関与した可能性を述べる。第14章では、霊験仏の仏師について、神仏の化身として登場した長谷寺縁起から、定朝や運慶が登場する壬生地蔵縁起、頰焼阿弥陀縁起への展開を指摘する。

仏像が伝来した場に関しては、第8章で南山城・若王寺に円珍像が伝わるのは、この地に未確認であった寺門系「狛千光眼寺」が実在したことによるとした。第11章は、峰定寺の阿弥陀三尊像を、未注目であった『京都府寺誌稿』から、明治維新まで水無瀬神宮に伝世し、配流先の隠岐で没した後鳥羽院の追善供養仏であったことを明らかにした。第12章は、近世地誌から仲源寺千手観音像は、もと東山鷲尾の地にあった四条家の金山院千手堂の本尊であったことを突き止め、寿永元年（1182）藤原隆季を願主として供養されたとした。

本論は単に美術史のジャンルに属するものではなく、仏教文化史論と言い得る広範囲な内容を

もつ著述である。それ故に、作品の位置づけが穏当な美術史学説の援用に終わっているのは物足りなさを感じる。しかし本論には、美術史家の目配りが及ばない、或は捨て去る史・資料を駆使して、新しい事象を見事に描き出す論考が多くみられることは、この短所を補うに余ある魅力と言えよう。また申請者の得意とするところは、通覧的把握と網羅的記述であり、この特徴を用いて像の伝来や存在する場を追求したものに好論が多い。この事を示すように、本論を構成する論考の被引用率は高く（成稿一覧に付記）、その範囲は美術史・仏教史・歴史学・国文学に及び、既に各方面での学的貢献が認められているといえる。

以上を総合して、本論文は、博士（文化史学）（同志社大学）の学位を授与するにふさわしいものであると認められる。

学力確認結果の要旨

2017年11月22日

論 文 題 目： 日本中世仏像文化史論―南都文化圏・慶派仏師を中心に―
学位申請者： 杉﨑 貴英
審 査 委 員：
主 査： 文学研究科 教授 井上 一稔
副 査： 同志社大学 名誉教授 竹居 明男
副 査： 京都大学大学院文学研究科 教授 根立 研介

要 旨：

上記の審査委員3名は、2017年11月8日午後3時30分から、徳照館5階文学部文化史学科研究室において、学位申請者に対し約3時間にわたって学力確認を行なった。まず口頭試問では、提出論文への詳細かつ多岐にわたる質問が行なわれたが、いずれに対しても的確かつ明快な応答が得られ、さらに申請者は南都における日本中世仏像および文化史のみならず、広くわが国全体の古代・中世宗教史・文化史についても広範な学識を有していることが立証された。また引き続き行なわれた語学試験（英語）においても十分な語学力を備えていることが確認された。

以上のことから、本学位申請者の専門分野に関する学力ならびに語学力は十分なものであると認める。

博 士 学 位 論 文 要 旨

論 文 題 目：　日本中世仏像文化史論―南都文化圏・慶派仏師を中心に―
氏　　名：　杉﨑　貴英

要　　旨：

本論は、日本中世において新たに制作される仏像彫刻の成立背景にはいかなる文化史的状況が存したのか、あるいは古代以来の既存の像を含む仏像彫刻をめぐっていかなる文化史的状況が存したのかを、第1部「仏師の社会的地位／信仰」、第2部「高僧と造像／仏師」、第3部「造像の背景をなす文化圏／文化状況」、第4部「仏像を意味づける言説／場」に配した各論17章と5つの附章、複数の章に関わる重要作例の研究史を総覧する2つの資料から多角的に探究したものである。副題に関していえば、初期慶派仏師の代表的存在たる快慶（?～1227以前）については第1～3部の、鎌倉前期の南都文化圏を代表する高僧である解脱房貞慶（1155～1213）については第2～4部の、それぞれ複数の章で論を及ぼしている。

第1部は、彫刻を生業とする工人的性格と僧名・僧形をなす僧侶的性格をあわせもつ中世仏師について、その社会的地位あるいは彼ら自身の信仰の問題を考察した3編からなる。

第1章「勧賞譲与による仏師の僧綱位叙任」では、院政期中央主流仏師（院派・円派・奈良仏師）に散見する、自らに対する勧賞を子や弟子に譲って僧綱位の初任・昇任をはかる事例を総覧し考察した。それは社会的地位保持・継承の有力な手段となったこと、承久の乱後における政治的変動、王朝的大規模造像の閉幕といった状況のなかで終焉をみることを論じた。

第2章「南都焼亡直後における一仏師の立場」では、南都復興期の初頭における造仏界の横断的把握を兼ねて、奈良仏師正系最後の人物たる成朝が自らの権利を主張した二度の訴えを検討し、造仏の権利や僧綱位の獲得に対する成朝の意識を論じた。さらに第二の訴えを伝える申文の特性を、中世前期の仏師が差し出した文書の網羅的把握という作業を通じて明らかにした。

第3章「慶派仏師の信仰の場と私的造像」では、運慶（?～1223）建立の私堂地蔵十輪院の関係史料を検討、家（一門）の信仰の場という性格とその後退を論じた。運慶追善像（湛慶造立）については快慶関与の可能性を新たに指摘し、また運慶作の可能性が高い六波羅蜜寺地蔵菩薩坐像については地蔵十輪院の遺仏とみる通説を補強した上で、来歴の問題に関し新案を提示した。

第2部では、鎌倉時代における僧侶の活動と造像あるいは仏師との関係について、近年に人文学の諸領域で研究が活況を呈してきた解脱房貞慶（1155～1213）に焦点をあて、4つの各論と3つの附章を通じて考察する。

附章1「解脱房貞慶をめぐる霊山浄土信仰の造形」は、第2部の総論的展望と第4章への導入を兼ねる。貞慶の生涯を通じて活動の根幹にあった釈迦信仰、とくに霊山浄土への信仰という局面に焦点を絞り、南都文化圏の造形および言説への反映を、没後の影響を含めて見通した。

第4章「峰定寺釈迦如来像」では、正治元年（1199）の表題像とその像内納入品を分析し、貞慶ら造立をめぐる人々の構成と、霊山浄土信仰を軸とする信仰背景の構成を浮き彫りにした。さらに造立以後の諸事情を論じた上で、峰定寺における伝来に関し新案を提示した。表題像は他の章にも関わる重要作例であり、資料1「峰定寺釈迦如来像研究資料」に研究史の詳細をまとめた。

第5章「正法寺阿弥陀如来像」の表題作は石清水八幡宮旧在で、近年に快慶の作風を反映する大作として再評価された遺品である。本章では、貞慶が同宮の丈六阿弥陀像の供養導師を建暦2年（1212）につとめたとする史料に着目、従来は建保年間（1213～19）造立とされていた表題作に比定できることを論証し、あわせて造像願主の社僧祐清と貞慶・快慶との関係を考察した。

第6章「現光寺十一面観音像」では、海住山寺所管の表題像について、同寺の中興者たる貞慶

が鼓吹した観音信仰との脈絡を見出し、弟子覚真（同寺二世）が没する 1243 年に作期の下限を求めた。これを承ける附章 2「南都復興造像と貞慶所縁の観音信仰」では、造立期間に貞慶十三回忌をはさむ興福寺食堂千手観音立像を、附章 3「解脱房貞慶影響下の造像二題」では福智院地蔵菩薩像・興福寺菩提院旧在釈迦如来像をとりあげ、貞慶の造像への影響を新たに指摘した。

第 7 章「解脱房貞慶と仏師快慶」では、近年に新たな提言が相次いだ貞慶・快慶の関係について、筆者の研究成果（第 5 章）を含めて総合的に検討した。「一針薬師笠石仏」に関する近年の新説を批判し、関係の初動と拡がり、両者没後の動向との関連性を考察した上で、嘉禄元年（1225）の東大寺釈迦如来像（善円作）が貞慶念持仏（快慶作、佚亡）の模刻である可能性を提示した。

第 3 部は、仏像の成立背景をなす文化圏あるいは文化状況の試掘に比重をかけた考察により、既知の作例・史資料に対する新たな理解や視野の獲得を企図した 5 編からなる。

第 8 章「若王寺智証大師像と狛千光眼寺」では、中世を通じて天台寺院が稀少な南都文化圏の周縁地域に伝世した天台寺門の祖師像に着目した。聖教史料に見出した「狛千光眼寺」に原所在を求めうることを論証、千光眼寺の様相を考察した上で、南山城南部地域における天台寺門関係の中世作例と史資料を総覧的に提示した。

第 9 章「菩提山蓮光房と解脱房貞慶」では、貞慶が著述を提供した菩提山正暦寺の住僧蓮光房が、同寺の寺誌的史料には法然（1133～1212）の弟子と記されていることに着目した。その信憑性を測定する作業を通じて、鎌倉前期の南都文化圏における造像環境を考察し、貞慶の阿弥陀信仰者への態度を美術史的関心からとらえ直した。

第 10 章「砺波・常福寺阿弥陀如来像の背景」では、快慶晩年の作風を反映する表題作の作期を 1220 年代に求め、浄土宗（玉桂寺旧蔵）阿弥陀像（1212 年）の納入品を手がかりに、浄土宗の越中への普及、浄土宗に帰依した徳大寺公継の存在、徳大寺家の荘園経営といった事情を背景とする造像の可能性を論じた。なお浄土宗像は他の章にも関わる重要作例のため、資料 2「浄土宗（玉桂寺旧蔵）阿弥陀如来像研究資料」に納入品と研究史の詳細をまとめた。

第 11 章「峰定寺阿弥陀三尊像の背景」では、表題の快慶派作品について不明とされてきた来歴の手がかりを明治期の行政文書に見出し、明治維新まで後鳥羽院をまつる水無瀬神宮（旧称・水無瀬御影堂）に伝世していたことを論証した。その上で、配流先の隠岐で没した後鳥羽院の追善供養仏として造立された可能性を論じ、快慶派と京都西山の地との脈絡に表題像をとらえた。

第 12 章「仲源寺千手観音像の背景」では、従来専論をみなかった表題像の来歴を検討、東山鷲尾の地にあった四条家の山荘兼寺院「金山院」の主要堂宇「千手堂」の本尊として、寿永元年（1182）、藤原隆季を願主として堂とともに供養された丈六仏である可能性が高いことを論じた。

第4部は、既存の古像あるいは新規に造立される像の性格を規定した言説あるいは場の探究を、主題ないし重点とした 5 編（および附章 2 編）からなる。

第 13 章「神護寺板彫弘法大師像と土佐金剛頂寺」では、正安 4 年（1302）造立の表題像の関係史料を検討し、鎌倉時代の弘法大師伝絵巻諸本に物語られる、土佐金剛頂寺に存したクスノキの立木仏の模刻を意図したものであることを指摘した。さらに附章 4「土佐金剛頂寺の祖師像をめぐる補説」で、金剛頂寺側の史資料や近世土佐の地誌を視点として改めて詳解した。

第 14 章「中世の霊験仏とその制作者をめぐる言説」では、まず中世における霊験仏の縁起を、像の成り立ちの観点からみて 4 つの類型があることを指摘しつつ概観する。その上で仏師が登場する矢田地蔵縁起・穴太寺縁起・長谷寺縁起・壬生地蔵縁起・頬焼阿弥陀縁起について考察し、とくに後 3 者に認められる特色と意義を論じた。

第 15 章「東大寺二月堂小観音と「生身」観」は、近時盛んな「生身（仏）」をめぐる議論において実践が少なかった通時的・機能論的検討を、東大寺二月堂の秘仏「小観音」を題材におこなった。儀礼に際し臨時的に機能する尊像から、二月堂で恒常的に礼拝される尊像に変化し、「生身の仏像」言説を惹起するに至った経緯を、縁起類のほか起請文にも着目して論じた。中世東大寺の言説世界に関してはさらに附章 5「東大寺の鯖の木と菩提樹」で、重源の『南無阿弥陀仏作

善集』の一条に関し、第4章で論じた峰定寺釈迦如来像にも連関する注釈的研究を試みた。

第16章「中世の新薬師寺をめぐる諸様相」では、仏像の場たる古代寺院が中世においていかなる変容をなしたのかを問題とする。その好適な事例として、これまで断片的にしか論じられてこなかった新薬師寺の中世に着目した。本尊への信仰や興福寺信円の関与、興福寺出身の貞慶による造営、春日信仰との関わり、草創の地をめぐる信仰の変化などから総合的に論じた。

第17章「冥府彫像とその場」では、鎌倉時代に出現した地獄関係の彫像の造立例とその立地を初めて総覧し、人文学諸分野での言及にも目配りしつつ展開を跡づけた。さらに最終章にあたるこの章では近世も視野に入れ、冥府彫像という局面において中世に成立をみた様相の行方そして限界までを論じた。

副題の通り、本論は鎌倉時代の南都文化圏・慶派仏師に関わる内容が中心をなす。ただし本論の主題に関しては、それらの範疇のみに収斂しない立体的把握を総体として図るため、11～13世紀における造仏界の動向を縦断的にとらえる研究（第1章）、藤末鎌初期における京都仏師の大作の年代と背景を確定する研究（第12章）、都と鄙が相関する様相のもとに作例の成立をとらえる研究（第10・11・13章）、中世を通じ全般的傾向・類別を把握する研究（第14章）、中近世を通じた実態を総覧的に見通す研究（第17章）を布置したのである。